目次

巻頭口絵 10
まえがき 26
【概説】琉球王朝と紅型 35
紅型の成立 35／階層の象徴 紅型衣裳 36／王国崩壊から近現代へ 37

第一章
第二次世界大戦後の琉球紅型像——《紅型復興期》知念績弘・城間栄喜とその弟子たちが目指した美の表現と試み 39

はじめに 40
一 時代との対峙——一九三〇年～一九六〇年における紅型をめぐる環境 41
敗戦から 41
利用法の開拓課題と尚順の視点 42
二 昭和の表現形式と沖縄系「型絵染」の誕生 45
昭和の表現と芹沢銈介作品との類似点 45
沖縄系「型絵染」ともいうべき作品群の誕生 46
王朝時代紅型の一系譜——染めと絵画の交歓 49
三 指定者四名の紅型——代表作品「着尺」に見る美 52
作品 52
到達した究極要素——「色」 59
時代の空気 60
おわりに——第二次世界大戦後の琉球紅型像と四氏 62

第二章
紅型宗家城間家十四代城間栄喜の壁掛——浦添市美術館収蔵品を中心に 63

はじめに 64
一 収蔵品の来歴と制作時の状況 68
来歴 68
法量・制作年代 68
一九四〇～五〇年代の材料入手と制作時の状況 70
生地 71／顔料 71／配色 71／制作時の状況・制作背景 73
二 収蔵品の図柄——三種の「壁掛」 74
「鯉水鳥沢瀉模様紅型」 74
込められた意味 74／二種の「鯉水鳥模様紅型」 74／「鯉」の玩具と沖縄美術における鯉表現の伝統 75／柳とティサージ（手巾） 78／図様の典拠——継承と創造 79

「首里雅景模様紅型」 82
出品 82／首里への想い 83／画面の変化 85
「進貢船首里那覇風景図紅型」 86
画面の変化 86／込められた意味 86／
「宝船」と「ニライ・カナイ」——海神祭（ウンジャミ）の明らかにすること 86／
琉球を象徴する画像としての進貢船図 88／
図様の典拠——古典と創造 90
三 栄喜「壁掛・小物」に表された題材と模様構成 92
琉球への想い
——琉球風景・琉球玩具ともう一点の「首里風景模様紅型」 92
海の風物——生い立ちの生んだ図柄の数々 97
おわりに 100

第三章
女流紅型師の誕生と系譜 101
渡嘉敷貞子の紅型
はじめに——女流紅型師の誕生 102
一 紅型における近代化 105
——女流紅型師の誕生・日本本土という土俵
女流紅型師と紅型——経済的自立と自己の開放 105
尚順男爵の死・近代化の波——公募展 107
渡嘉敷の登場 108
二 渡嘉敷貞子——生い立ち・紅型への取り組み 110
生い立ち 110
渡嘉敷と紅型 111
三 渡嘉敷貞子の紅型——作品 113
当時の反響 118
四 没後 娘・克子の試み 121
——うちゅくいに優れた哲郎、楽しさを受け継いだ克子の作風
おわりに 123
【参考資料】紅型師の言葉 124
城間栄喜／大城貞成／玉那覇有公／玉那覇道子／藤村玲子

第四章
画家と紅型 127
第二次世界大戦後の名渡山愛順・末吉安久・
森田永吉・名渡山愛擴
はじめに 128
画家の表現——二つの方向性 128

一　画家の感性――名渡山愛順　130
復興との係わり　130
愛順と紅型　131
工房の設立　132
作品　133

二　絵師と紅型との関係――紅型表現の系譜　137
現代の主流　137
王朝時代の紅型　138

三　沖縄系型絵染の誕生――末吉安久・森田永吉　144
末吉安久
人　144／下絵の提供　145／目指した表現　146
森田永吉
沖縄県立首里高等学校教諭として　151／工房設立　153／作品　154

四　文化財指定・紅型・型絵染　157
文化財指定と沖縄の画家と紅型師――生まれた概念と言葉　157
末吉と森田の相違　158
沖縄の画家の苦悩――「紅型の型絵染」　160

五　現代への系譜――名渡山愛擴　162

おわりに　165

第五章　現代の紅型

創作柄の展開と伝統の系譜　167

はじめに　168

一　渡嘉敷貞子の登場――近代的作家と創作柄　169
渡嘉敷の登場　169
表現の意義と後進への影響　170
その後の技術開放
――近代的作家としての紅型師の先駆けとなった渡嘉敷の存在　172

二　復興期後第二世代の紅型
――玉那覇有公・玉那覇道子・城間栄順・藤村玲子の世界　174
保存会の結成　174
動向――沖縄県と国による文化財指定、保持者認定状況　175
認定と離れて――名渡山愛夫　178
戦後から現代へ――第二世代の主流と特質　180
玉那覇有公　180／城間栄順　183／藤村玲子　187

三　第二世代の別系――創作柄の系譜　194
沖縄びんがた伝統技術保存会の会員たち――嘉陽宗久・糸数隆　194
現代へと続く創作の展開　195
金城昌太郎　197／西平幸子　201／知念績元　203

おわりに――展望　206
一つの危惧　206

【参考資料】王朝時代紅型——残された戦前の紅型着装写真 210

第六章
紅型の踊衣裳——伝統芸能の場における琉球王国末期から現代の色と形 213

はじめに 214

一 琉球王国末期から廃藩置県 明治・大正期へ 215

二 伝えられた豊年祭の踊衣裳——部落・ムラ 220

豊年祭（八月踊り・村遊び） 220

現存する琉球王朝時代紅型踊衣裳——松田・屋嘉・名護・小浜 222

三 第二次世界大戦後の組踊と琉球舞踊 233

戦前戦後の様相 233

琉球舞踊——真境名佳子と紅型踊衣裳 234

「真踊流」紅型踊衣裳の実際 234

組踊——宮城能鳳と紅型踊衣裳 238

四 戦後の紅型師の試み——知念績弘、名渡山愛順、渡嘉敷貞子、金城昌太郎 240

おわりに 241

【参考資料】親泊久玄と組踊 242

あとがき 244

クレジット 248

【巻末資料】琉球紅型制作工程 269

琉球紅型制作工程 i

琉球紅型制作工程表 xvi

著者略歴 270